

# 水稲早期栽培における重要害虫の発生相

一丸政雄\*・末永 一\*

JOHIMARU M. & SUENAGA, H. On the Insect Patterns occurring  
in the Early Cultivated Paddy Field

演者等は水稲の早晩期栽培における害虫勢力の動向を解析し早晩期栽培における害虫防除の狙いを明確にしようとしている。茲には 1954 年～1955 年の 2 ケ年に亘つて調査した早期栽培における重要害虫の発生相についてその概要を述べる（文中の棲息数はいずれも坪当虫数）。

水稲の栽培時期、品種、管理、調査方法等は省略。

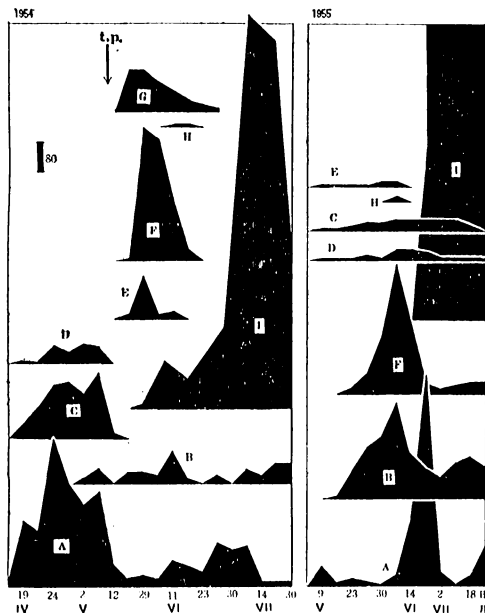
**結果の要旨** 早期栽培全期間に亘つて捕えた害虫は次の 11 種である。ツマグロヨコバイ、ヒメトビウソカ、フタテンヨコバイ、ヨツテンヨコバイ近似種、ウスバミドリヒメヨコバイ、ヨツモンヒメヨコバイ、トビイロウンカ、アブラムシ類、フタオビコヤガ幼虫、イネクキミギハバエ、二化螟虫幼虫、今これ等 11 種

の中から重要な害虫の発生消長を示すと次図の様である。

1) 苗代期は除紙後の 4 月 20 日頃から ツマグロヨコバイ、アブラムシ類、フタテンヨコバイの 3 種類が夥しく侵入蝟集する。とりわけツマグロヨコバイの第 1 世代成虫の密度は高く、多い時は 300 頭から 400 頭に達し苗代全期間に亘つて加害する。2) 移植後から幼穂形成期に亘つてイネクキミギハバエの発生が目立つ、その密度は比較的に低いが髓内における幼虫の喰害による被害は大きく、発生初期には 15% から 20% の傷葉が見られた。3) 5 月下旬頃より幼穂形成期にかけてヒメトビウソカが夥しく蝟集する、その密度は一時非常に高くなるが (350 頭から 400 頭) 6 月 10 日頃から急速にその勢力を失い、しかも次代の幼虫は非常に少くその後圃場の中にその勢力を残すことはな

\* 九州農業試験場

## 早期栽培に於ける主要害虫の発生消長



A ツマグロヨコバイ, B ツマグロヨコバイ幼虫  
 C アブラムシ類, D フタゲンヨコバイ, E イネクキミギハバエ, F ヒメトビランカ, G イネクキミギハバエ幼虫, H フタオビコヤガ幼虫, I 二化螟虫第1化期幼虫, t. p. 移植

い. 4) このヒメトビランカと時を同じくして5月中

旬頃からツマグロヨコバイの第1世代幼虫が、更に少し遅れて5月下旬からツマグロヨコバイ成虫が発生する、その密度は高く最も多い時は600頭に達する。このツマグロヨコバイ成、幼虫の勢力は1時落ちるが尚相当高い密度を以て収穫期まで維持される。5) 本田中期(6月10日前後)から収穫期に亘つて二化螟虫の第1化期幼虫が夥しく発生する、その数は6月下旬から7月上旬にかけて最も多く、1,000頭(1954)或は2,600頭(1955)に上り7月下旬の刈取時でも400頭(1954)或は2,000頭(1955)も甚だ加害している。

要約 苗代期にはツマグロヨコバイが外周から蝗集加害し、本田初期から幼穂形成期に亘つてイネクキミギハバエ幼虫の加害があり、同じ本田初期から6月10日頃にかけて夥しいヒメトビランカの発生が見られる。また5月下旬頃からその勢力をようやく圃場の中に確立し始めたツマグロヨコバイの成、幼虫の発生が目立つ、この成、幼虫の混合勢力はその後も相当高い密度を保持しながら収穫期まで加害する。二化螟虫第1化期幼虫は6月10日前後から急速に密度を高め刈取時まで被害を逞しくする。以上の諸害虫は早期稲の虫害防除の対照として重視されるものである。これに対しこの地区では早期稲でのトビロウソウ、セジロウソウの発生はあまり顕著ではないが、後期に到つてトビロウソウの勢力が助長される傾向を認める。